みなかみ町有機農業実施計画

（令和7年度～令和11年度）

自然と共生する「みなかみスタイル」で育む農業環境プラン

みなかみ町の概況

町の概況

平成17年に旧月夜野町、旧水上町、旧新治村が合併して誕生した群馬県の最北端に位置する町です。町の大部分は山林であり、上信越高原国立公園を擁する広大な森林を有し、町を中心として、隣接する新潟県魚沼市、南魚沼市、湯沢町の一部が「みなかみユネスコエコパーク（生物圏保存地域）」に登録されるなど、利根川源流の町として自然と共生するまちづくりを進めています。

東京から150km、新潟市から150kmの距離にあり、町内にはJR上越線、上越新幹線、関越自動車道、国道17号線が走るなど、首都圏からのアクセスにも恵まれており、観光産業が発展しています。また、水上温泉郷、猿ヶ京三国温泉郷及び上牧温泉など、多くの温泉地を有しており、多くの観光客が訪れる地域となっています。

農業の概況

豊かな自然環境の中で多様な農産物が生産されており、令和4年における農業産出額は31億2千万円、主な内訳は、果実7億3千万円、野菜6億5千万円、米3億4千万円となっています。

果実については、りんごの生産者が多く、他に、おうとう、うめ、もも、ぶどう、すもも等が生産されています。野菜は、きゅうり、トマトの生産者が多く、他に、はくさい、なす、ねぎ、たまねぎ等、多様な野菜が生産されています。米は、地域ブランド米「水月夜（みなつきよ）」をはじめ、品質の高い米が生産されています。

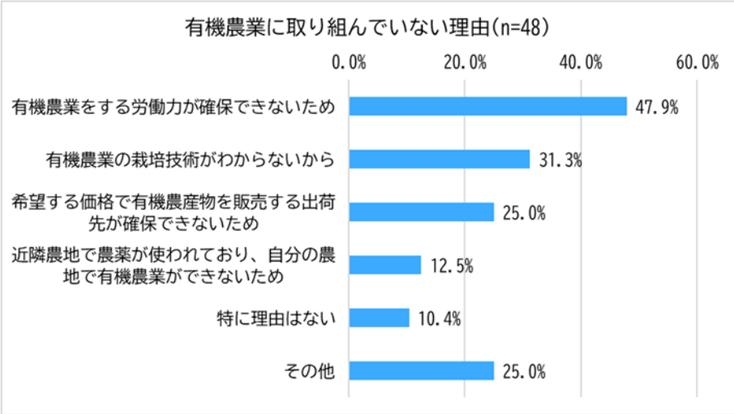
近年は、全国的な傾向と同様、農業者の高齢化や後継者不足等により、農業経営体の減少や未利用農地が増加しています。このため、みなかみ町資源リサイクルセンターにおいて、町内で排出される牛糞や食品残渣、鶏糞を新たな資源として有効利用する堆肥を製造しており、この製造した堆肥を活用した資源循環型の農業を推進するなど、ユネスコエコパークに登録された町ならではの環境にやさしい農業の普及により、課題解決に取り組んでいきます。

みなかみ町の有機農業の現状

有機農業の取組状況

環境にやさしい農業の代表である有機農業の現状については、有機農業に取り組んでいる農業者を調査したところ、令和6年現在、3名となっており、たまねぎ、じゃがいも、さつまいも、かぼちゃ、にんにく、ワイン用ぶどうを栽培し、その耕地面積は2.2haとなっています。

「有機農業に取り組む意向のある農業経営体の有機農業に取り組んでいない理由」



（令和6年みなかみ町農業経営体アンケート調査）

用語の定義

オーガニックビレッジ

有機農業の生産から消費まで一貫し、農業者のみならず事業者や地域内外の住民を巻き込んだ地域ぐるみの取組を進める市町村のことです。

有機農業

1. 化学的に合成された肥料及び農薬を使用しない
2. 遺伝子組換え技術を利用しない
3. 農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減する

以上の農業生産の方法を用いて行われる農業です。

有機農産物

1. 周辺から使用禁止資材が飛来し又は流入しないように必要な措置を講じている
2. は種又は植付け前2年以上化学肥料や化学合成農薬を使用しない
3. 組換えDNA技術の利用や放射線照射を行わない

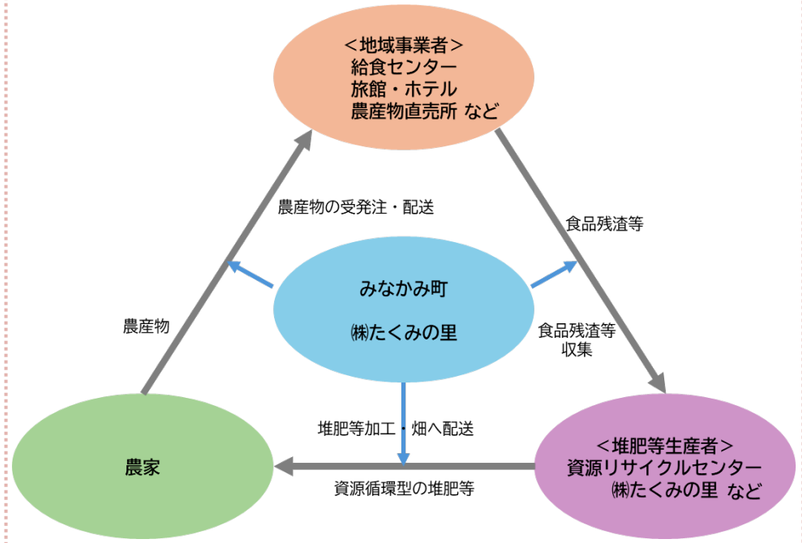
など、「有機農産物の日本農林規格」の基準に従って生産された農産物のことです。

有機JAS認証

有機食品のJASに適合した生産が行われていることを登録認証機関が検査し、その結果、認証された事業者のみが有機JASマークを貼ることができます。「有機JASマーク」がない農産物、畜産物及び加工食品に、「有機」、「オーガニック」などの名称は表示できません。

みなかみスタイル

みなかみ町資源リサイクルセンター等において、町内で排出される食品残渣等を堆肥や液肥等に加工し、それらを用いて農産物の生産を行い、当該農産物を町内の直売所や旅館、ホテル、学校給食で提供する環境負荷低減・資源循環の取組を「みなかみスタイル」と位置づけ、地域循環システムの確立に取り組んでいきます。



みなかみ町
MINAKAMI TOWN

水と森林と人を育む
利根川源流のまち、みなかみ。

令和7年3月

有機農業推進における課題

1. 有機農業の定義に関する共通理解の醸成

町内農業経営体へのアンケート調査を実施した結果、有機農業に係る共通認識が醸成されているとはいえない状況です。有機農業を推進していく上では、本計画で定義する「有機農業」及び「みなかみスタイル」について、町内農業者の理解醸成を図っていく必要があります。

2. 労働力の確保

有機農業に取り組む意向のある農業経営体において、有機農業に取り組んでいない理由をアンケート調査したところ、「有機農業に取り組む労働力が確保できないため」と回答した方の割合が47.9%と最も高く、有機農業に取り組むための労働力の確保や、省力化による労働力の軽減が課題となっています。

3. 有機農業の栽培技術の共有

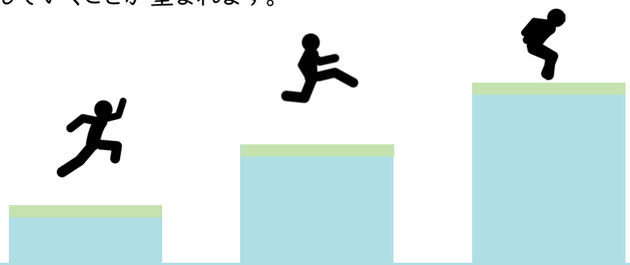
有機農業に取り組む意向のある農業経営体において、有機農業に取り組んでいない理由をアンケート調査した結果「有機農業の栽培技術がわからないから」と回答した方の割合が31.3%と高くなっています。また、農業者へのヒアリング調査を実施したところ、有機農業に取り組みたいが、具体的にどうすればよいのかわからないという声がありました。

町においては、有機農業に取り組む農業者が少なく、相談できる相手が少ないことなどから、栽培技術を相談できる、また、学べる仕組づくりの構築が課題であるといえます。

4. 段階的な有機農業の推進

町は利根川源流の町として、自然豊かな環境で農業が営まれていることからも、農業者の環境保全に対する意識が高いといえますが、小規模経営体や高齢の農業者が多く、急激な形態の転換が難しいことに加え、有機栽培が難しい果樹の生産が盛んな地域でもあります。

そのため、中長期的かつ段階的に有機農業に取り組んでいく必要があり、まずは、自然環境の保全に対する高い意識を活かして環境負荷低減・資源循環型農業である「みなかみスタイル」を推進し、労働力の確保や栽培技術の向上を図りながら、段階的に有機農業に取り組んでいくことが望まれます。



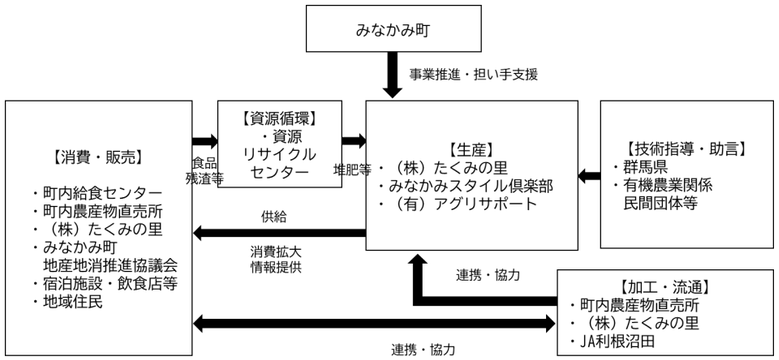
5年後に目指す目標（令和11年）

項目	現状値（R6）		目標値（R11）
有機農業者数	3名	▶	7名
有機農業の耕地面積	2.2ha	▶	3.6ha
みなかみスタイル生産者数	0名	▶	15名
みなかみスタイルで生産された農産物の学校給食への供給量	0kg	▶	1,500kg

有機農業に取り組む農業者や農地面積が少ない状況にあり、有機農業の栽培技術が普及していないことから、有機農業に取り組む農業者の支援体制を整備しつつ、環境負荷低減・資源循環型農業である「みなかみスタイル」に取り組む農業者を増やしながら、段階的に有機農業の拡大を推進していきます。

推進体制

みなかみ町オーガニック推進検討委員会



取組内容

有機農業の生産段階の推進の取組

1. 有機農業等の理解の醸成

①	有機農業等の普及に向けたセミナーの開催
②	「みなかみスタイル」の推進

2. 有機農業等の栽培技術の共有・向上

①	栽培技術研修会の開催
②	「みなかみスタイル」栽培マニュアルの活用
③	実証ほによる有機農業等の実践（5年間）
④	「こだわりの農産物」の生産

3. 有機農業等の担い手の確保

①	有機農業等に取り組む新規就農者の確保・育成
②	農作業の省力化（機械・設備の導入）の実証

有機農業で生産された農産物の流通、加工、消費等の拡大の取組

1. みなかみスタイルの推進

①	「みなかみスタイル」で生産された農産物の宿泊事業者等への供給体制の構築
②	町内直売所での「みなかみスタイル」コーナーの設置
③	「みなかみスタイル」のPRに関する取組

2. 有機農産物等の販売促進

①	オーガニックマルシェの開催
②	学校給食での有機農業等や「みなかみスタイル」で生産された農産物の供給